

民俗の文化資源化と生涯学習・地域活動

——千葉県立中央博物館と房総のむらを事例として——

松 崎 憲 三

はじめに

千葉県における文化行政と博物館

中央博物館の「山のフィールド・ミュージアム」

房総のむらの「農業体験」

結びにかえて

はじめに

「多極分散型の国土形成」を謳った四全総や、竹下登首相の「ふるさと創生」施策に対応して、平成元年度（一九八九）の予算政府案に「ふるさと」の名のつく新規事業が数多く盛り込まれた。旧文部省の「ふるさと歴史の広場」、農林水産省の「ふるさと森林活性化対策」、旧環境庁の「ふるさといきものふれあいの里」等々である¹。総額の中ではわずかな予算にすぎないが、所謂「地方の時代」が掛け声倒れに終わっていた点を考慮すれば、これまで国の事業に希薄であった、「地域のアイディアと自主性の尊重」という姿勢が、多少なりとも施策に盛り込まれたという点では評価に値しよう。しかし、こうした事業の施策理念や目的の不明確さもあって、地方自治体の反応はさまざまであったが、過疎化にあえぐ自治体を中心に、地域社会の再編と振興に向けて積極的に対応策をとるようになった。すなわち、都市と交流しつつ、地方が持っている自然的・文化的資源を最大限に生かして、（a）自然環境の保全（自然観察会、観光開発の実施）、（b）産業の振興（地産産品の開発と産直活動、オーナー農園の開設）、（c）伝統文化の継承と活用（祭り・イベントの開催）に努めたのである。かくして「ふるさと資源化」は全国的に展開するに至ったが、近年こうした動きに対して批判的な検証もな

されている^②。

一方、日本民俗学会の「民俗学と文化資源に関する特別委員会」は、より客観的に民俗の文化資源化の動向を把握し、問題点をさぐるべく会員に向けてアンケート調査を実施した。諸般の事情で思いのほかデータが集まらなかったようであるが、民俗を「文化資源化することによる場の変化や意味づけの変化などを問題点として意識しながら、その効果を積極的に評価する意見も多く見られた」としている^③。

筆者はかつて、博物館活動を通じた地域活性化の取り組みについて論じたことがある^④。その場合、博物館といっても主として対象としたのはエコー・ミュージアム（に準じたもの）であった。小稿でもこれらとの関連から、千葉県立中央博物館における「房総の山のフィールド・ミュージアム」および房総のむらの「農業体験」を主たる分析対象として、民俗の文化資源化と生涯学習・地域活性化をめぐる問題にアプローチすることにした。

一、千葉県の文化財行政と博物館

千葉県立中央博物館および房総のむらの活動を見るに先立って、千葉県の文化財行政と県下の博物館が置かれている状況について概観しておくことにしたい。

文化財課編の『千葉県博物館・文化財行政』には、「本県の自然と歴史の中で生まれ、受け継がれてきた伝統文化を継承し、その適正な保存・管理をはかるとともに、先人の知恵や工夫を学びつつ、それを基礎に新しい地域文化の創造に努めていく必要がある」と記し、その目的を高らかに謳っている。^⑤このうち文化資源（同書では文化遺産としている）の「適正な保存・管理」を担うのが主として文化財行政であり、文化財の調査・指定、文化財保存事業の促進・史跡公有化事業の助成等を行っている。

なお、平成四年（一九九二）に「地域伝統芸能を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（いわゆるお祭り法）が制定された頃から、文化庁でも文化資源（文化財）の活用を積極的に推進するようになったが、^⑥それとの関連で民俗文化についていえば、千葉県では、平成八年度（一九九六）から県内九地区持ち回りで、神楽・獅子舞・祭り囃子等民俗芸能（無形民俗文化財）の公開事業を実施している。その目的は、県民に理解と認識を深めることおよび、伝承活動の活性化や後継者等の育成である。（１）出演に備えた練習、道具・衣装の整備等において今後の継承にプラスになっている。（２）世代間・出演団体間・各自自治体の文化財担当者間の交流もはかられ、少なからず継承の力になっている。（３）多くの企業・個人の協力を仰ぐことで民俗芸能を支える意識の醸成に与っているのではない。（４）ただし、市町村教委に余力はなく、人的・予算的に負担となっているようである。

以上が文化財課側の現状認識である。⁷⁾この現状認識については何とも言い難いが、全国的に「民俗芸能大会」が行われるようになった当初、それこそ「場の変化や意味づけの変化」についてかしましく議論されたが、イベントブームの中でいつしかこの種の行事も定着してしまつた感が強い。なお、文化財の公開との関連でいえば、考古学の分野では、発掘調査現地説明会や出土遺物の活用を積極的に行っている。後者は、出土遺物やパネル等をセットにして学校、公民館さらには観光イベントへの貸し出しや出前授業を実施するというもので、好評を博しているようである。さらには「文化財探検隊」と称して、文化財の公開活用事業の一環として、参加者を募つて現地を訪れ、実物を目の前にして解説し理解を深めるといふようなことが年三回ペースで行われている。これは分野を問わないようである。民俗学の分野でも、考古学同様の出前授業を積極的に行うべきだろう。文化財課の直営事業というのも一つの方法だが、教員や博物館学芸員との連繫を模索すべきである。なお、出前授業については、青森県立郷土館では積極的に行っており、教員経験のある学芸員が中心メンバーとなっているようである。⁸⁾また、高齢社会を迎えて、民具を回想法に役立てる事業も、熊本市熊本博物館や愛知県師勝町立歴史民俗資料館で実施されている。⁹⁾出前先を社会福祉施設や老人ホーム等に拡大することにより、より広く社会に貢献できるのであり、一考に値しよう。

さて、先に引用した『千葉県博物館・文化財行政』中の「先人の知恵や工夫に学びつつ、

それを基礎に新しい地域文化の創造に努めていく」役割を負わされているのは、どちらかといえば博物館である。千葉県では、昭和四三年（一九六八）に策定された「千葉県の博物館設置構想」に基づいて、順次地域博物館が設置されてきたが、平成十四年（二〇〇二）策定の、財政難に基づく「千葉県行財政システム行動計画」によって管理・運営の見直しが進められ、博物館受難の時期を迎えた。すなわち、平成十六年（二〇〇四）四月に房総のむらと房総風土記の丘が統合され、平成十八年（二〇〇六）度には大根博物館と総南博物館が、中央博物館の分館に再編された。さらに平成二十年（二〇〇八）四月に上総博物館が、翌二十一年（二〇〇九）四月に安房博物館がそれぞれ木更津市、館山市に移譲され、県立美術館博物館数は、美術館一館、博物館四館、分館三館となった。また、房総のむらには指定管理者制度が導入され、平成十八年（二〇〇六）四月から千葉県教育振興財団が管理者となり、今日に至っている。¹⁰ いずれにしても千葉県の場合、このように館数の多いのが一つの特徴であるが、その特徴を生かすべく県立博物館ネットワーク活動の一環として、昭和五十一年（一九七六）から平成四年（一九九二）までは共同企画による巡回展が催され、平成五年（一九九三）以降は合同企画展・合同企画事業を展開している。¹¹

さらには、「フィールド・ミュージアム」の拠点づくりを行いつつ、そのネットワーク化を図る事業も進められている。各博物館がこれまで蓄積してきた多くの資料・情報と専門性を基

に、山・川・海の現場（フィールド）の自然や文化そのものを「資料」と考えた新たな博物館活動を展開しているのである。¹²⁾ こうした発想は、地域全体、一つの文化圏全体を博物館と位置づけるエコ・ミュージアムに通ずる面もあるが、平成二十年度（二〇〇八）から、県立中央博物館で「山のフィールド・ミュージアム」、同大利根分館・関宿城博物館で「川のフィールド・ミュージアム」を、県立中央博物館海分館の博物館で「海のフィールド・ミュージアム」を、NPOや各種団体と連携しながら開始した。しかし、「山のフィールド・ミュージアム」以外は活動が本格化しておらず、県立中央博物館大利根分館が、「川のフィールド・ミュージアム」の活動として「水塚調査隊」なる事業を実施したにすぎない。そこで先ず、中央博物館の「山のフィールド・ミュージアム」に焦点を当てながら、課題に取り組むことにしたい。次いでオープンスペース型の博物館、房総のむらの活動について検討を加えてみたい。

二、県立中央博物館の「山のフィールド・ミュージアム」

（一）「山のフィールド・ミュージアム」の概要

房総半島南部に広がる房総丘陵は、照葉樹林帯の北限に位置し、南方系の生物が見られるとともに、氷期の名残りともいわれる北方系の動植物も棲息し、自然の宝庫といわれている。

この房総の山の自然に直接触れ、親しみ、学ぶための施設として県立中央博物館分館・山の博物館の設置が計画され、平成七年（一九九二）に担当スタッフが置かれた。君津市南部の清和県民の森を拠点に、山の自然そのもの、すなわち現場（フィールド）を「博物館資料」、「展示物」として活動を展開する「フィールド・ミュージアム」を目指すというものである¹³。三年毎に事業計画を立てており平成十五年と十七年度の第一期はその骨格づくりが主眼であり、関係機関と連携しながら「三島小教室博物館」、自然観察路「山みち展示」、観察会「山の学校」などの事業を軌道に乗せた。平成十八年度からの第二期は、連携の輪を広げ、小中学校・大学・研究機関・社会教育機関・NPO・市町村等さまざまな関係者と事業を取り組むべく「房総の山のフィールド・ミュージアムネットワーク構想」を推進した。そうして平成二十一年度からの第三期に「山の博物館（仮）」の実現を目指すというものである¹⁴。

平成十五年（二〇〇三）四月にオープンした「三島小教室博物館」は小糸川の源流部に位置するが、小学生や保護者、さらには清和地区その他の人々が訪れ、動植物や山のくらしに関する話などの資料・情報を提供し合っており、山のフィールド・ミュージアムの一つの拠点として定着しつつある。さらには平成二十一年（二〇〇九）度から、小櫃川源流部に近い蔵王小にも、教室博物館がオープンした¹⁵。

なお、房総の山のフィールド・ミュージアムが事務局となって文化庁から「平成二十年度芸

術拠点事業 ミュージアムタウン構想」の委託を受けてスタートしたのが「おばあちゃんの畑」プロジェクトにほかならない。文化庁が平成十四年（二〇〇二）度から実施している「芸術拠点形成事業」は、地域活性化に果たす美術館・博物館の役割に着目し、その活動を支援しようとするもので、

- (1) 子どもを対象としたミュージアム事業及びその開発にかかわる事業。
- (2) ミュージアムを核とした地域資源の整備・活用にかかわる事業。
- (3) ミュージアムを核とした地域の人材・組織の育成・連携・活用に係る事業。
- (4) 地域振興と一体となったミュージアム事業。

以上の四つを柱とするものである。¹⁶⁾千葉県立中央博物館には既に「山の博物館（仮）構想」があり、文化庁の事業を先取りする形で準備を進めて来たが、渡りに舟とばかり、この事業に乗ったのが「おばあちゃんの畑」プロジェクトである。「おばあちゃんの畑」プロジェクトの命名については、「『房総の山のフィールド・ミュージアム』の活動地域である房総丘陵で作物のタネをとり続け、畑を守ってきたのはおばあちゃん達である。また彼女達は畑について豊富な知識を持っている」ことにちなんでだという。そしてその目的を、「房総丘陵で活動する諸団体が連携して『おばあちゃんの畑』について調べ発信することを通して、新たな地域文化を創造することにある」としている。¹⁷⁾

(2) 「おばあちゃんの畑」プロジェクトの活動について

山のフィールド・ミュージアム担当のS学芸委員によると、当初は地域の人々が集まってさまざまな活動ができる「山の広場」を作る予定で、それはハード面・ソフト面の揃ったものだったという。しかし、近年の経済状況からハード面の整備が不可能となり、やむをえずソフト面を中心とする博物館活動に切り替えたのが、現在の「山のフィールド・ミュージアム」のことである。そうして第二期の活動に入って思いついたのがこの「おばあちゃんの畑」プロジェクトで、房総のむらにおける経験が役立ったという。昔栽培していた今無いものを調べ、栽培経験のあるおばあちゃん達に協力を仰ぎながらそれらを作り、さらには子供達に教えていくことで、栽培技術や食文化を伝承させていこう、そう考えた。そうして君津市三島小学校や久留里城博物館、地元公民館等と連携しながら試行錯誤でスタートした。たまたま平成二十年度の「芸術拠点整備事業」に応募したところ幸いにも採択され、皆に声をかけやすくなったという。

その「おばあちゃんの畑」プロジェクトの活動は、以下の三つに集約できる。¹⁸⁾

(a) 「おばあちゃんの畑」を調べる。

君津市立三島小・同秋元小等の児童による「タネ探偵団」と学芸員が、かつて栽培していた種の収集に努めた。今までにフリソデザインゲン（お雑煮の具にする菜葉）、マナ、シロツカボ



写真1 おばあちゃんの畑（君津市市宿地区）

チャ、キビ、ヤエナリ等六〇種類の種が見つかったという。一方で、市宿の名主を勤めていた星野家の日記を地域の人々と伴に読み、安政期の農作業について畑を中心に探り、当時の畑の景観も復元が可能となった。加えて房総丘陵で製造され、広く流通していた農具の一つ久留里鎌や上総唐箕について調べた。

(b)「おばあちゃんの畑」をつくる。

三島小、秋元小と、市宿地区の休耕地で畑をつくり、かつて自家採取されていた種を

蒔き、栽培するというもので、「宿場の風の会」の常連五・六人を主体とする十二・三人がそのメンバーである。彼女達のたまり場は、地域の伝統産業を再現したK氏の炭焼き窯に隣接する建物である。ここを拠点にお十夜、餅搗き大会、久留里鎌めぐり等さまざまなイベントを実施しており、月刊の広報誌を刊行しているほどである。初年度はフリソデマメ、マナ等一五種を栽培した。休耕地を利用した第一農場は七畝ほどの広さであったが、平成二十一年度にはさらに四畝広げて七種の稲を栽培した。また、S学芸員さえ知らなかったようであるが、第二農場一反（うち栽培面積およそ七畝）が開設されたとのことで、きわめて意欲的である。おばあちゃん達は、「初めはえらい仕事を持ち込んでくれた」と思ったそうである。そうして「少しでも栽培してみるか」という気持ちでスタートしたものの、「自分達がかかわって来た仕事でもあり、とっつきやすかった」という。「でも大変は大変よ」と言いつつ、品種も栽培面積も広がった。それだけ共鳴するものがあつたのだらう。「棚田を耕作していた頃はテマガリがあつて、お互い行き来しながら『お茶事』をしていた。しかし今ではそんなこともなく、皆が集まる良い機会」と位置づけ、お互い楽しんでいようである。

(c)「おばあちゃんの畑」を発信する。

皆で調べたり体験した「おばあちゃんの畑」のことを、君津市清和公民館の文化祭で発表したり、リーフレットにまとめるなどの活動を行っている。さらには収穫祭を開いて地域の人々

を招待し、料理したものを食べるなどしている。

こうした活動が、地域社会の再編や活性化にどのような役割を果たしているのだろうか。

およそ三〇年ほど前までは、市宿地区でも祭りが行われており、住民が一体化する数少ない機会であったが、それもなくなった。しかし、今ではおばあちゃん達が中心となり、婦人会や青年会と連携してさまざまなイベントを実施しており、活況を呈するようになった。問題はせっかく復活させた伝統品種の栽培をいかに伝承していくかである。小学生との活動は、いわば先行投資であって先行不透明である。一方、地元の若者達は農業にさほど関心を示さず、従って自文化理解はまだ一部の人にしか及んでないようである。「自文化理解を踏まえて新たな文化の創造へ」といった道筋は、そう簡単に描けそうにない。S学芸員は『おばあちゃんの畑』を核にさまざまな技術を伝承しながら、やがてそれで食べていけるような人が出るようにしなければ」という遠大な構想を描いている。彼女が注目したのは、この辺りに入植した新規就農者達である。彼らには「昔風のものにあこがれる傾向がある」とのことで、「おばあちゃんの畑」に来てもらい、交流するようになった。おばあちゃん達も、「若い人達と話が出来る」と前向きである。技術伝承のスタート地点に、ようやく立つことが出来たのである。ただし残念なことに、君津市には他地域に見られるような新規就農者受け入れ制度は全くない。

すなわち、こうしたせつかくの動きをサポートする体勢が整っていないのである。

三、房総のむらの「農業体験」

(1) 房総のむらの概要

房総のむらは、江戸時代後期から明治時代初期に存在した商家、武家屋敷、農家などを、当時の環境を含めて再現するとともに、房総地方の伝統的な技術や生活様式を直接に体験して学ぶことができる体験博物館として、昭和六十一年（一九八六）四月に設置されたものである。当初は一部のみ公開、十一月から上総の農家で、「砂田の年中行事」等の演目を行うとともに本格的な活動を開始する。その後下総・安房の農家等を設置して平成四年（一九九二）六月から全施設公開となる。平成十六年（二〇〇四）四月に隣接する房総風土記の丘と統合、平成十八年（二〇〇六）四月より指定管理者制度が導入された。房総のむらはその目的を、「伝統的なくらしや道具、ものづくりの技を保存・継承し、新たな価値を見出し、展示や体験を通して歴史や文化を学ぶ」、「歴史や自然を愛する心を育み、伝統文化の理解や学習、地域づくりを支援する」この二点に置いている¹⁹。

統合後の房総のむらは、旧風土記の丘を中心とする「風土記の丘エリア」と、旧房総のむら

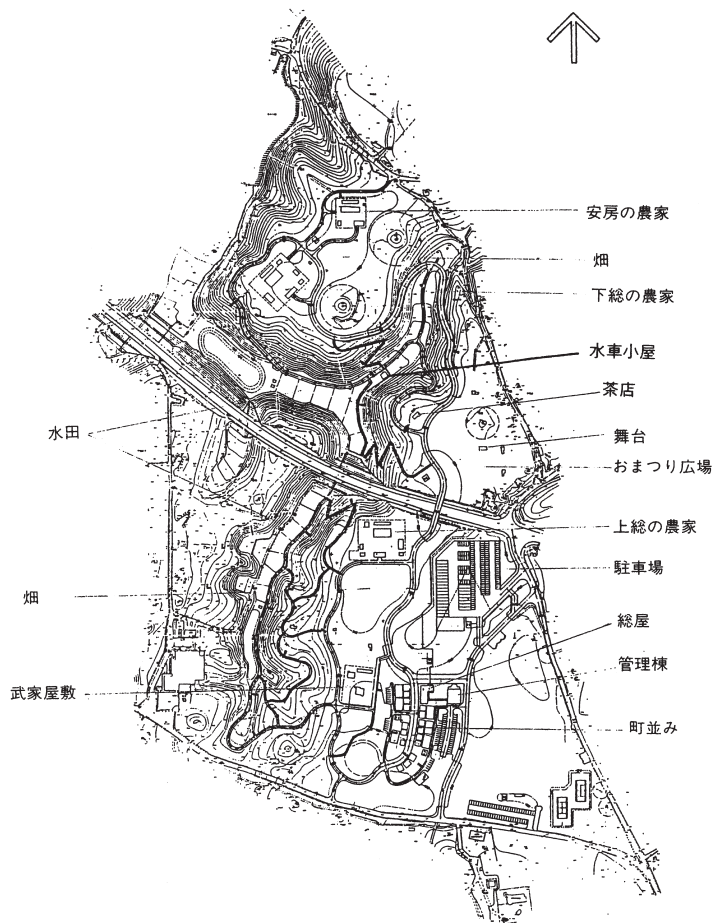


図1 旧房総のむら平面図（『千葉県立房総のむら年報』より）

を中心とする「ふるさとの技術体験エリア」との二つに分けられているが、ここで扱おうとするのは言うまでもなく後者である。ここにある建造物は、旧佐原市の町並等をモデルとした商家一七棟、武家屋敷一棟の他、上総・下総・安房の農家各一棟ずつと、農村歌舞伎台、水車小屋である。これらは、「当時の環境を含めて再現」されたもので、移築したものではない。展示技法でいえば、情景再構成展示ともいえるが、台東区・下町風俗資料館、江東区・深川江戸資料館のように博物館の中に再現されたものではなく、屋外にあって田畑や林野が伴うなど、景観も広い範囲にわたって再現されている所に特徴がある。建造物については、オープン当初は真新しすぎて映画のセットのような印象を持たれ、評判はあまり芳しくなかった。しかし二〇年以上経って建造物も古色を帯び、言い替えると落ち着いて文化財然として来たためか、茅葺屋根の農家や暖簾を下げた商家のたたずまい、水車の回る音等に心を癒されるという人も多いようである。

これらの建造物では、各職種に見合った展示がなされているとともに、農家では農事曆に沿って田植えや収穫といった農業体験のほか、機織り・藁細工・食品加工等が、商家であればそば打ち、しぼり染め、紙漉き、和ろうそく作りなどの体験学習が行われている。平成二十年度の実績は表(一)の通りであるが、その数の多さ、種類の豊富さには圧倒される。対象は小学生を中心とする団体向けと、老若男女を問わず個人向けのものがある。また、実演し、指

民俗の文化資源化と生涯学習・地域活動

表 1 平成 20 年度房総のむらの活動

区分	事業名	期日	対象	定員	参加人数
学校支援	学校支援—古代米作り	6/10	栄町立酒直小学校		15
	学校支援—土人形	1/29, 1/30, 2/9	酒直小学校・酒々井小学校		
	学校支援—昔の遊び	1/17, 2/6	栄町立酒直小学校		
館外体験	ふるさと再発見講座（栄町、成田市と連携し、安食、龍角寺地区の商店の調査、町並みガイド研修などを実施）	5/24, 6/14, 7/12, 8/2, 9/6, 27, 10/18	栄町、成田市		109
教職員研修	印旛地区教職員研修	6/2, 8/7	印旛地区教育研究会	33	30
	教職員を対象とした博物館研修	7/25	教員	40	40
子ども教室	おもちゃを作って遊ぼう	4/20	子ども		88
	紙芝居・ちばの昔語り	5/18	子ども		243
	太鼓をたたこう	6/15	子ども		318
	たき火をしながら遊ぼう	11/16	子ども		22
	風揚げをしよう	2/15	子ども		139
	どんと焼きの火でお餅を焼こう	1/12	子ども		155
里山観察会 （中央博と連携）	秋の山野草	10/19		20	30
	きのこ	9/28		20	30
	木の実	11/16	20	4	
	夏の虫	8/3		20	24
	芽吹きと芽生え	4/29		20	52
巡回展説明会	出土遺物巡回展「房総発掘ものがたり」解説会	7/13, 21, 27, 8/3, 10, 24, 31, 9/14			118
商家実演・体験	菓子、鍛冶、紙、川魚、薬、呉服、小間物、細工、酒、燃料、商家団体、瀬戸物、そば屋、壘、茶、本瓦版、めし屋、木工	年間			56,558
団体系験	農家・商家・資料館・総屋	年間			20,916
農家実演・体験	安房の農家、上総の農家、下総の農家、農家共通	年間			7,770
武家屋敷実演・体験	武家屋敷実演・体験	年間			4,520
総屋及びおまつり広場実演・体験	総屋及びおまつり広場実演・体験	年間			13,430
風土記の丘資料館実演・体験	風土記団体	年間			154
	風土記の丘資料館実演・体験	年間			245
講座	房総考古学講座	5/25, 7/27, 8/24, 10/26, 12/21, 2/22		362	191
落語会	房総座	6/8, 10/5, 2/1			270
コンサート	歴史の里の音楽界 ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉	10/12		300	338
房総のむら友の会事業	「ふるさと祭り」	11/2～3			3,003

（平成 20 年度版『千葉県の博物館・文化財行政』より）

導するのは、炭焼きその他特殊なものを除き、各種技術を修得した学芸員にほかならなかつた。端^{はた}から見ていて、この学芸員は大変だなど同情しつつ、結構人事異動もありそうなのに技術継承はどうしているのだろうと思っていた。しかし、平成十八年（二〇〇六）に指定管理者制度が導入され、学芸員の数が半減した結果、学芸員の方は企画・運営の専従となり、周辺の農家その他の人達を非常勤職員として援用することで活動を維持するようになった。学芸員にとって不幸中の幸いだったかもしれない。また、指定管理者制度導入のもう一つのメリットは、制約が少なくなつた分、新しい企画を打ち出しやすくなつた点だという。

さて、房総のむらでは各建造物毎の個別の行事に加えて、正月、春秋のまつり、むらの縁日・夕涼み等季節毎にむら全体のまつりが実施されており、さらには音楽会・落語会、自然観察会や地域づくりの支援を目的とする「ふるさと再発見講座」などを開催してフル回転している様子が見て取れる。ちなみに、平成十九年（二〇〇七）五月三日（木）から六日（日）まで四日間にわたって開催された「春のまつり」についてその様相を見ると

（ア）展示（生活歳時記）

・ 鯉のぼり、吹流し（おまつり広場）

・ 端午の節供（商家・武家・農家）（四・五日）

（イ）実演・体験（昔のくらし、昔のあそび）

- ・ 農家―コースター作り、新聞紙かぶと作り（五日）、ざる・かご作り実演（四・六日）、竹編みのコースター作り（四・五日）
 - ・ 武家―甲冑試着、野点（五日）
 - ・ 商家―千代紙ろうそく作り、泥めんこの絵付け
 - ・ 風土記―火起こし（三日）、勾玉作り（四日）、手形作り（五日）
 - ・ おまつり広場―昔の遊び（竹馬、ペーゴマ、こま、紙鉄砲とぼし）、風車作り
 - ・ 大木戸奥―昔語り（三日）
- （ウ）特別イベント
- ・ 佐倉囃子（六日午後―歌舞伎舞台）
 - ・ レトロ写真館（管理棟一階）
 - ・ 人力車乗車体験（管理棟前・館内）
 - ・ 紙芝居・昔語り（三日午前・午後、大木戸奥）
 - ・ 時代衣裳変身体験（総屋二階）
 - ・ 猿回し（四・五日、歌舞伎舞台）
 - ・ けん玉パフォーマンス（歌舞伎舞台）
 - ・ 竹トシボ作り（三・六日、おまつり広場）訪三日―国際とんぼ協会、六日―栄町建設業

協会

・トレイグライダー・クルクルコプター作り（おまつり広場）

・けん玉あそび（おまつり広場）

（エ） 伝統工芸品店先販売 大川功修（和菓子）、松崎啓三郎（浮世絵）、岩崎雅子（煎餅）、

鎌田芳朗（張り子）、高木末吉（桶）、駒田照（木工挽物）、北島和男（ラシャ切り鋏）、

安井永子（染色小物）、穂積実（つまみ簪）、森隆夫（雨城楊枝）、大野正敏（植木鋏）、

川添睦子（七宝焼）

（オ） 特別販売

・館内生産物・近隣農家生産物、昔のおもちや、駄菓子・綿菓子の販売

・学校生産物の販売 印旛高校・印旛特別支援学校（三日）、成田西陵高校・香取特別支

援学校（四日）、下総高校（五日）以上である。²⁰

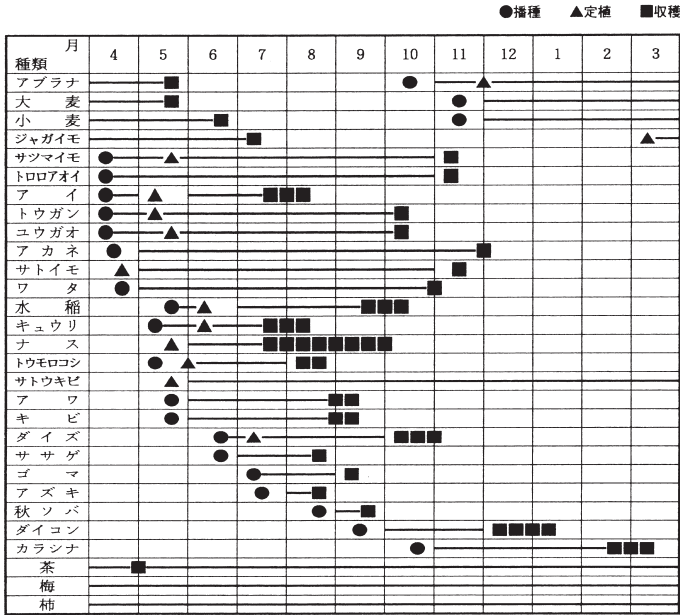
この間の入館者数総計二一四一人、体験学習参加者数五五八四人に上り、とりわけ風車作り参加者が最も多く、一一二六人に及んだ。なお、伝統工芸品や近隣農家の生産物、県内の高校における生産物の販売は、賑やかしの意味が強いものの地産物の育成、地域活性化にもそれなりの役割を果たしていると思われることのできる。

(2) 上総の農家と農業体験

農家の建造物としては、上総の他下総、安房地方のものと計三棟あり、その周辺に田畑が展開している。当然のことながら栽培植物には地域差があり、それに対応して農事暦、農業体験の内容は異なる。いずれにしても、伝統的農業技術の再現・修得・伝承を目的として展開されたものである。ここでは、全ての農家が揃った平成四年（一九九二）の事業のうち、団体を主たる対象としている上総の農家のケースを見ておくことにしたい。上総の農家周辺には、水田二反、畑二反があり、ここにおける事業内容には①稲作・畑作・炭焼き等に関する演目、②水田・畑などの景観復元、③他部門で必要とする演目材料の供給、④屋敷内や周囲および林（松・竹）中の植栽の管理である。これに沿った年間栽培表と農業体験の内容は表（2）の通りである。

このうち稲作に関しては、明治期の稲作技術に準じて（a）種籾浸し↓（b）苗代（短床揚床）↓（c）田植え（正条植え）↓（d）稲刈（鎌）↓（e）稲架かけ↓（f）脱穀（千端抜き）↓（g）天日干し（筵）↓（h）初摺（土磨臼）↓（i）俵詰め、の工程で実施されていた。上総の農家における「農事暦」事業について検討を加えた石井泉は、「稲作全般について言えることであるが、これまでのものはいくつかの部分的な調査や文献からの再現であり、調査を蓄積・検討し、特定のモデル農家などを決めるような統一的再現は実現できなかった」と

表2 上総の農家年間栽培表



『房総のむら年報』7号（平成4年刊）による

の見解を述べている²⁾。真にその当時の稲作の再現を目指そうとするならば、県立中央博物館の「山のフィールド・ミュージアム」になぞらえて、「里のフィールド・ミュージアム」活動を行い、特定地域の稲作農法を修得する必要がある。しかも稲作のみならず、畑作や生活歳時記、食品加工等にまで広げて調査し、当時の習俗、技術を追求すべきである。しかし、石井が求めたような厳密性は、調査・研究レベル・実験的再現レベル、農業体験レベルのどの段階まで求めるべきなのか、また



写真2 上総の農家とその前面に広がる畑



写真3 農業体験のシーン（大根の収穫）

どこまで可能なのか、詰めておく必要があったのではなからうか。

しかし、そうした議論を重ねる余裕もなく、指定管理者制度を導入した現在では、近辺の農家出身者を技術指導員として迎え、栽培もほぼ委託しているというのが実情である。ある意味では当初の理念と異なる方向に動き出してしまったともいえる。また農業体験も、稲作の工程に沿って通年行うのではなく、田植え・収穫等部分的に体験するというのが一般的である。参加する側の時間的余裕あるいは位置づけ、学芸員側のキャパシティの問題が、そうした状況たらしめているのだろう。

一方畑作について石井によれば、「畑作演目は種類は多いものの全てが、収穫又はその後の食品加工の工程だけの内容となっている」という⁽²⁾。畑作物の場合は栽培期間が短く、栽培工程も比較的単純なため、やむおえない部分が多い。筆者も畑作儀礼の調査を行っていて、一連の体系的儀礼を見出せずに戸惑った経験を持っている。畑作物の栽培工程のあり方と連動するのだろうが、麦作だけは例外であり、その点は考慮されてしかるべきだろう。

上総の農家関連では、これら直接的農業体験に加えて、手揉み茶・梅干し作り、醤油作り等かつて自家製造していたものを食品加工として体験学習に組み込んでいる。さらには手工芸（竹ボウキ・クマデ作り、ワラ細工等）、生活歳時記（餅搗き、節供凧作り、七夕、ドンド焼等）、子供のあそび（竹馬、水鉄砲他）等の体験学習も実施しており、そのメニューの多さに

は驚かされる。

個人を対象とした下総の農家のそれについて若干言及するならば、農業体験希望者はさまざまだが、市街地からこの辺りに引越して来た人、停年退職して近くの団地を終の棲家とするに至った人等が、豊かな生活を求めてガーデンングにいそむべく、農業技術の修得を目的にやって来るという。現在の世相に対応したニーズに込えていることになるが、こういう人達は技術をマスターしたとたんに来なくなるそうである。

いずれにしても、農業体験者数はスタート時に比べて着実に増えている。しかしながら稲作に象徴されるように、工程の一部だけにかかわる形となり、その他の体験学習でも材料をスタッフが全て準備するなどのお膳立てをし、通り一遍の体験をして帰るといふ演目も少くない。民俗的世界に関心を抱く契機となれば、あるいは楽しんで帰ってもらえれば良いという目的だけならそれで済むのだろうが、伝統的な技術の体系と、その背景にある民俗文化を理解してもらおうとするならば多少問題があるろう。とにかく楽しんでもらうという演目は必要であるが、道具の管理・保管等も含めて、資材の調達・加工から使用に至る全工程にかかわる演目の設定を視野に、とにかく多すぎるメニューの精選を行うべきである。また、リピーターを増やすべく技術修得レベルに応じたグレード制（機織が唯一この種のものとして存在する）の導入も考慮すべきである。ともあれユニークな博物館だけに、期待するところ大である。

最後に、「新しい地域文化の創造」にかかわる活動について触れておきたい。房総のむらでも、県立中央博物館同様「文化芸術拠点形成事業」の助成を受けた活動を開始した。すなわち、成田市、栄村と連携しつつ地域の自然・文化の再認識と次世代への継承を目的に動き出したようであるが、まだ緒についたばかりであり、今後の行方を見定めて行きたい。

結びにかえて

経済状況の悪化から、「冬の時代」を迎えた千葉県下の博物館の現状を概観し、次いで中央博物館における「山のフィールド・ミュージアム（特に『おばあちゃんの畑』プロジェクト）」の活動と 体験型の野外博物館、房総のむらの活動について現況報告を行った。

近年は、文化庁の「芸術拠点整備事業（美術館・博物館活動基盤整備支援事業）」に象徴されるように、博物館は単なる生涯学習の場に留まらず、地域活性化の拠点として位置づけられているようである。そうした要請に応えるべく、両施設とともにユニークな活動を展開している。

前者の「おばあちゃんの畑」プロジェクトは、地域の人々を巻き込みながら、かつて栽培し、今はなくなってしまった種をさがしてそれを栽培し、そうした行為を通じて自文化を理解

するとともに、新たな文化の創造を目指そうとするものであった。目標はほぼ半ばまで達しているようにも思われるが、この活動は、S学芸員とおばあちゃん達、そしておばあちゃん達のいわば束ね役、K氏が連携することによって初めて成し得たものである。とりわけS学芸員の努力と資質に負う所が大きい。しかしながら、その分「山のフィールドミュージアム」との関係が不明確な点は否めない。エコー・ミュージアムの場合、一つの文化圏が博物館そのものであり、コアと称する中央施設で文化圏全体を鳥瞰するとともに各サテライト、すなわち農園や職人の仕事場が散在し、そこで個々の技術伝承や文化を学ぶというシステムを取り、何らかの統合性を維持している。「山のフィールド・ミュージアム」の場合、コアも存在せず、しかも自然系の分野が強く「おばあちゃんの畑」の位置づけがはっきりしないため、どうしても一体性、統合性が弱いという印象を与えてしまうのである。

また目標の一つ、新たな文化の創造に関しては、難題ながら地域の若者をどう吸引しうるかにかかっている。外部の新規就農者に触発されて、内部の若者が目ざめてくれることを願うばかりであるが、新規就農者の受け入れ制度を整えらるとともに、一刻も早く後継者の新規就農システムを整備すべきである。

一方後者の房総のむらは、オープン当初からユニークな博物館として注目され、農家・商家・武家屋敷それぞれにおける展示と体験学習を積極的に展開して来た。各施設における個別

活動がある一方、房総のむら全体の祭りが存在するという形で、何らかの統合性はあるものの、コアと呼べる施設は存在しない。コアと呼べる中央施設を通して、房総のむら各施設の活動やその位置付けを把握することによって、千葉県全体の民俗文化が理解できるのであり、やはり全体を鳥瞰できる施設が必要だろう。それによつてこそ、房総のむらとしての一体制、統合性が保たれるのではなからうか。また、体験学習についていえば、多様な演目を通じて楽しむことはできようし、個々の技術や民俗文化の一端は理解できるだろうが、一連の作業体系、文化体系の理解には至っていないし、技術の伝承という点でも問題が残る。演目を精選しつゝ、そうした課題方法を模索することも必要である。一方、房総のむらの諸活動を通じた地域活性化への波及効果は確かに認められるものの、地域づくりへの貢献に関しては、新たに事業を開始したところであり、今後の活動に注目したい。

（附記）小稿の執筆に際しては、千葉県教育庁文化財課の諸氏、各博物館の学芸員の方々、そして元気で朗らかな「おばあちゃんの畑」プロジェクトの方々にお世話になった。逐一お名前を書き上げるとはさし控えたいが、心より感謝申し上げます。

註

- (1) 平成元年度一月二十七日付朝日新聞朝刊「ふるさと予算大売出し」による。
- (2) 岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館 二〇〇七年 一〜二九八頁。
- (3) 「民俗学と文化資源に関する特別委員会報告」『日本民俗学』二五六号 日本民俗学会 二〇〇八年 一六四〜一六九頁。
- (4) 松崎憲三「過疎地域の活性化と岡山県下の『ふるさと村』の創設を中心に」『昭和初期山村の民俗変化』名著出版 一九九〇年 三〇五〜三三〇頁。同「博物館と地域活性化と昭和三十年代ブームとのかかわりから」『日本常民文化紀要』第二五輯 二〇〇五年 二九〜五八頁。
- (5) 千葉県教育庁教育振興部文化財課編刊『千葉県の博物館・文化財行政』二〇〇九年 二三頁。
- (6) その後平成十年策定の「文化振興マスタープラン」を経て、同十三年の「文化芸術振興基本法」制定以後拍車がかかった。
- (7) 文化財課『房総の郷土芸能』実施報告・別紙2』二〇〇九年。
- (8) 渡辺真路「青森県立郷土館の小・中学校を対象とした移動博物館について」『青森県立郷土館調査研究年報』三二二号 二〇〇八年 八五〜九四頁。小池隆秀「移動博物館の現場から」(小池惇一編『人間文化研究における連携構築と社会発信に関する方法論の考究』大学共同利用機関法人人間文化研究機構)二〇一〇年 三三〜四一頁。
- (9) 岩崎竹彦編『福祉のための民俗学』回想法のススメ』慶友社 二〇〇八年。松崎憲三「博物館と地域活性化と昭和三十年代ブームとのかかわりから」前掲論文 四四〜四七頁。
- (10) 千葉県教育振興部文化課編刊『千葉県の博物館・文化財行政』前掲書 七頁。
- (11) 同 右 八頁。

- (12) 同 右 九頁。
- (13) 千葉県立中央博物館編刊『房総の山のフィールド・ミュージアム』二〇〇六年 一頁。
- (14) 同 右 一六頁。
- (15) 千葉県立中央博物館房総の山のフィールド・ミュージアム編刊『しいむじな』二四号 二〇〇九年 一頁。
- (16) 文化庁文化財部美術学芸課美術館・歴史博物館室「芸術拠点形成事業」『文化庁月報』一二号 ぎょうせい 二〇〇七年 一二～一三頁。なお平成二十一年度より「美術館・博物館活動基盤整備支援事業」に名称を変更した。
- (17) 島立理子・木曾野正勝「一五〇年前の畑を探る」『おばあちゃんの畑』プロジェクト成果」『千葉県立中央博物館研究報告・人文科学』一一―一二〇〇九年 六七～八〇頁。
- (18) 『おばあちゃんの畑プロジェクト』平成二十年度リーフレット第一号による。
- (19) 千葉県立房総のむら編刊『千葉県立房総のむら年報』二二二号 二〇〇七年 一～五頁。
- (20) 同 右 一一～一二頁。
- (21) 石井泉「房総のむらにおける上総農家の『農事暦』事業の現状」『千葉県立房総のむら年報』七同館 一九九三年 一〇二頁。
- (22) 同 右 一〇五頁。